

「一体感」と「断絶感」

塹江 清志, 水野 和夫*, 塹江 光子**

システムマネジメント工学科

(1998年8月28日受理)

The Feeling of Togetherness and The Feeling of Rupture

Kiyoshi HORIE, Kazuo MIZUNO* and Mitsuko HORIE**

Department of Systems Management and Engineering

(Received August 28, 1998)

The purpose of this paper is to detect a Japanese radical psychological trait and a West European radical psychological trait.

There are six theories which detect Japanese psychological traits.

Horie (1994) examined each of these six theories and identified "the Feeling of Togetherness" as a Japanese radical psychological trait.

"Individualism", "Democracy", "the Modality of Human Relations", "Modern Rationalism", and "Modern Natural Science" are pointed out as expressing West European psychological traits.

It is suggested that these mental products (Individualism and others) are caused by "the Feeling of Rupture".

Therefore, it is concluded that "the Feeling of Rupture" is a West European radical psychological trait.

要 旨

本論文の目的は、日本人の根源的心理特性と西欧人のそれを明らかにすることである。

日本人に特有な心理特性について考察している理論は6つある。塹江(1994)は、それらの理論を検討して、日本人の根源的心理特性として「一体感」の心理を指摘した。

西欧人に特有な心理特性の表出として「個人主義」、「民主主義」、「人間関係(の様式)」、「近代合理主義」、「近代自然科学」が指摘された。これらの精神的所産の原因として「断絶感」の心理が導出された。

それゆえ、西欧人の根源的心理特性として「断絶感」の心理が指摘された。

1 本論文の目的

本論文の目的は、日本人の「根源的心理特性」が「一

体感(の心理)」であり、西欧人(欧米人)のそれが「断絶感(の心理)」であることを明らかにすることである。

2 日本人の「根源的心理特性」としての「一体感」

「根源的心理特性」という言葉を著者は、諸々の心理特性がそこから派生、導出されるような、いわば源泉となるような心理特性を指す言葉としてここで用いる。これまでに様々な研究領域において、他民族(主に欧米人)との比較の上で日本人(日本民族)に特徴的、あるいは、固有の諸々の心理特性が諸家によって指摘されてきた。著者は、それらの心理特性の根底にあってそれらを生成せしめる根源的心理特性を指す言葉として「日本人の根源的心理特性」という言葉をここで用いる。

2.1 「一体感」の心理

「一体」とは、俗に云えば、我々日本人が日常生活の中で好んでよく使用する「心は一つ」という言葉によ

*愛知技術短期大学, **岐阜教育大学

て示される意味である。すなわち、ある個人の「心的内容・心理状態」と他者の「それ」が一致、あるいは、同じである状態を指す。(両者の心理が一致、同じであるから2つの心理の間には断絶、切れ目がなく連続である。すなわち、「一体」となる。)

そして、「一体感」とは、「一体」を意識的にせよ、無意識的にせよ、感覚している心的状態、心理を指す。

また、「一体感信仰」の心理とは、ある個人が、他者との人間関係において、「一体」、そして、「一体感」が存在する、存在しようということを意識的にせよ、無意識的にせよ、その存在に対する客観的証拠なしに先験的に信じている、あるいは、信じたいという心理、心的状態である。

さらに、「一体感志向」の心理とは、「一体感信仰」の心理に基づいて個人が「一体」、「一体感」を確認、あるいは、獲得すべく働きかける心理状態である。

2.2 日本人の根源的心理特性としての「一体感」の心理

塹江¹⁾は、日本人の根源的心理特性として「一体感信仰の心理」を導出している。その導出過程を以下に簡条書して要約する。

① 日本人の心理特性の特徴についての諸説の中で6つの理論が有名で、かつ、高い評価を得ている。

それらは、本居宣長の「もののあはれ」論(源²⁾)、中根³⁾の「場の心理」論、小此木⁴⁾の「阿闍世コンプレックス」論、木村⁵⁾の「人と人との間」論、土居⁶⁾の「甘えの心理」論、源²⁾の「義理・人情」論である。

② それらの理論において指摘されている心理特性は、「情」の心理、「場」の心理、「日本的マゾヒズム」の心理、「関係人間」の心理、「甘え」の心理、「義理・人情」の心理である。

③ それらの心理の各々について検討した結果、各々の心理が成立するためには、その源泉(原因)となるべき、心理特性が要請されることが分かった。

④ その問題の心理特性こそ「一体感」の心理であり、この心理の存在を想定すれば、この心理から前述の諸家の指摘する日本人に固有の6つの心理特性の全てが派生、導出されることが分かった。

⑤ それゆえ、「一体感」の心理(「一体感」、「一体感信仰」、「一体感志向」の心理)が、「日本人の根源的心理特性」であると結論された。

3 西欧人の根源的心理特性としての「断絶感」の心理

3.1 日本人と西欧人

① 日本人

人類は、人種的にはモンゴロイド、ニグロイド、コーカソイドの3つに分類される。日本人は、人種的にはモンゴロイドに属し、東アジア、東南アジア、太平洋沿岸に分布する南方モンゴロイド系とアジア大陸(中国、シベリア、朝鮮)に分布する北方モンゴロイド系とから成る。南方モンゴロイド系統は、縄文人(港川人)として日本列島に定住し、縄文時代(草創期は、1.2万年前か1万年前まで)が彼等によって展開された。北方モンゴロイド系統は、2,700年前頃に渡来弥生人として日本列島に住みついたのである。したがって、2つの系統のモンゴロイド(「海さちびこ・山さちびこ」、小島⁷⁾)が現代日本人の祖先なのである。以来、2つのモンゴロイド系の子孫が、この日本列島という自然環境を生活環境として2,000年以上にわたって「生」の歴史を展開して今日に至った。この2,000年以上の期間は、世界の他の域に比べて、海外、すなわち、外国からの異人種、異民族の混入、流入なしに日本人(日本民族)は、生の歴史を培養してきた。そして、前述のような「一体感」の心理を育ててきたのである。

② 西欧人

コーカソイド(白色人種)のルーツはコーカサス地方にあるという。この地方を発生地として、欧、露、印の諸地域に子孫は拡散した。コーカソイドの中にいくつかの民族があり、また、1つの民族がいくつかの地域(国)に分散した。また、17世紀以降大規模に米大陸に移住し、国を形成して北米大陸を支配してきた。

白人のこれまでの歴史をみると、「日本人(日本民族)」という概念に対応するのは「白人(インド人を除く)」である。なぜならば、欧州、ロシアに拡散した白人は、欧州ロシアを含めて欧州大陸全体を生活圏(日本人(日本民族)のそれは日本列島)として、地域間、民族間、人種間交流を歴史的に遂行してきた。

国民性、民族性に関わることを論議(とくに生活環境としての自然環境との関わりで論議する)ときは、歴史的に長期にわたって相互交流が行なわれてきた地域を1つの単位として抽出して、その地域の住人の特性として論ずべきであると考えからである。

少なくとも西欧社会を中心とする白人社会は現在でも階級社会である。階級社会の主役は支配階級である。白人社会の支配階級の在り方を歴史的にみると地域区分(ロシア、欧州;欧州の中で東欧、西欧、南欧、北欧)など殆んど意味がない。なぜならば、王室、貴族を中心

とする支配階級は歴史的に長期にわたって地域を越えて絶えず婚姻関係を形成し、閥閥を構築してきた。その結果、支配階級は「一族」なのである。さらには、18世紀後半以降 Rothschild 家が台頭し、白人社会の支配階級の閥閥による一大ネットワークの重要な接(合)点に位置を占めることによって、Rothschild 家が白人社会の支配階級を支配するようになったので、支配階級は「一族」なのである。それゆえ、「日本国」に対応するのは「白人国(欧米露国)」なのである。

また、被支配階級も、歴史的にみると日本人とは比べようもない程、国など超越して欧州大陸を、そして、17世紀以降は北米大陸をも含んだ地域を生活圏として生きてきたのである。白人社会の住人にとって国、国民、国家などというものは日本人のように拘束条件にはならない。大体、国などいいかげんなものである。それは、支配者側のそのときの事情(政治、経済上での理由)によってどうにでも(拡大、縮小、消失、産出)なるものなのだ。

とは云っても、白人世界内で比較すれば交流の歴史、頻度の観点からロシアは孤立していたのでロシアは切り離される。とすれば、日本人に対応するのは「欧州人」である。ヘブライズム(キリスト教文化)、ヘレニズム(ギリシア・ローマ文化)の2つが欧州全体を貫き社会、文化の基底となっているという。この意味でも「欧州は1つ」である。また、ドイツ人は、「我々ドイツ人」という表現よりも、「我々ヨーロッパ人」、あるいは、「我々キリスト教徒」という表現を好むという。

しかし、ここで抽出される彼等(白人)の根源的心理特性である「断絶感」の存在を想定できるもの(「合理主義」、「近代自然科学」、「個人主義」、「民主主義」)を明確な形で産出したのは「西欧」(英、独、仏を中心とする)である。それゆえ、本論文では、「西欧人」を「日本人」に対応するものとして捉える。

日本人は「単一民族」であると云うが、西欧人こそ「ゲルマン民族」の単一民族であると云ってもよい。歴史的には、ゲルマン民族の一部族であるフランク族が構築したフランク王国が、現在の独、仏、伊の起源である。英は、ケルト人(始源地は、ルーマニア、あるいは、カスピ海付近)が先住民であり、その後ゲルマン民族のアングル人、サクソン人が渡英して、ケルト人をアイルランドに駆逐し、さらに、その後ゲルマン民族のバイキングが渡英している。バイキングが建国したキエフ公国がロシアの起源である。デンマークを含む北はバイキングの国である。

3.2 西欧近代化時代の意義

① 西欧近代化時代とは

西欧の歴史学者は、18世紀、19世紀を近代とし、16世紀後半から17世紀一杯を「西欧近代化の時代」と呼んでいると木村⁹⁾は云う。西欧近代化の時代とは以下に述べることから明らかなように人類史上特別な、そして、極めて重要な意味をもつ時代なのである。

② 西欧近代化時代の西欧世界の状況

西欧世界は、紀元前1,400年から今日までの間に5回の氷河期を体験しているが、第5回目の氷河期は、1,550年から1,850年に至る300年にもわたる有史時代最大のものであったという。その300年間の期間の中で17世紀の100年が最寒の時期であった。したがって、西欧近代化の時代とは氷河期の時代でもあった。このことは西欧世界を以下のような状況においたのである。

氷河期の「寒冷化」は、「寒さ」と「飢え(「食糧作物不作」による「食糧不足」)と「経済的低成長」を生ぜしめた。「飢え」による「慢性的栄養失調」は、「疫病(ペスト)」を大流行させた。「飢え」、「寒さ」、「病気」は、西欧世界住人の人心の荒廃、社会全体に充満した欲求不満を介して「魔女狩り」、「戦争(一揆も含む)」を生成させた。

したがって、「西欧近代化の時代」は、「飢え」、「ペスト」、「魔女狩り」、「戦争」の「四(重)苦」の状況にあったと云える。それゆえ、「西欧近代化の挫折の時代」とよべるのである。西欧世界の歴史において「どん底」の時代であった。

③ 西欧近代化の時代の西欧人の精神状況

前述のように西欧近代化の時代が挫折の時代であり、「四(重)苦」の時代であり、「どん底」の時代であったことは、西欧世界の住人である西欧人の精神状況も悲惨なものであったことを意味する。

西欧世界の歴史上最大の挫折に直面して、西欧人の精神構造を支配したのは「断絶感」である。「生」の挫折は、生を営んできた生活環境(世界)による人間の生の阻止であり、人間(の生)と生活環境との対立、断絶である。「断絶感」は、対人関係においては「不信感」を生ぜしめる。「生の挫折」から由来する自己と世界との間の「断絶感」、「不信感」は西欧人の心から他者への「やさしさ」、「受容の精神」を消失させる。そして、個別利害に執着せしめる。個々人自分一人が生き残るのに精一杯であり、他人のことなどかまうゆとりがなく、他者の中には悪意しか求めず、また、見出せず、共感喪失の精神状況であったと云う。正に「万人の万人に対する闘い」の時代状況であった。

④ 西欧近代化時代の意義

前述のような西欧近代化の挫折の時代における西欧世

界の状況、西欧人の精神状況を原因としての精神的所産が、「個人主義」、「民主主義」、「人間関係（の様式）」、「近代合理主義」、「近代自然科学」である。これらの精神的所産を生成せしめたことに西欧近代化の時代の意義があると木村⁹⁾は云う。

木村⁹⁾は、これらの精神的所産は人類史上「西欧（人の精神）」においてのみ、そして、西欧近代化の挫折の時代という一回限りにおいて経験されたこの時代状況においてのみ産出されうる極めてユニークな精神的所産であると述べている。

「個人主義」、「民主主義」、「人間関係（の様式）」は「共感なき共存の形成」であり、これによってのみ「近代市民社会」の構築が可能になるのである。したがって、極めて「西欧的な所産」でありながら20世紀以降の人類社会にとって不可欠なもの、ということは、「普遍的」なものであり、「それ」を世界に提供したのだ。よって西欧世界の「脱西欧化」、「普遍化」が達成され、かつ、西欧世界による世界支配が達成されたのである。

「近代合理主義」、「近代自然科学」は、地球環境に対立・対処してそれを「支配・制御・管理・操作」することを可能にさせる人類にとって最も有力な武器（手段）であり、これらの前では神は無力な存在となったのである（人類は19世紀は神への信仰に生きてたが、20世紀は科学信仰に生きてたと云われる。）。

それゆえ、人類の生をこの地球環境の中で可能にするにはこれらの精神的所産は不可欠なのである。したがって、これらについても前述の「共感なき共存の形成」についてと全く同じことが云える。

3.3 西欧近代化時代の精神的所産

① 個人主義

前述したように西欧近代化の挫折の時代に西欧人の精神に生成された他者に対する不信感、西欧社会を構成する人間集団を分断し、個人の次元にまで還元した。個々人は、孤立し、正に「個（孤）人」となったのである。すなわち、個々人は、「個（孤）体」として析出され、自己自身が「個（孤）人」であることを発見し、「個」の自覚が発生したのである。

以後、個人を人間の認識単位とするようになったのである。そして、義務、責任、権利、権限などが個人に関わる概念として定立されたのである。

「不信感」を基盤として個人が抱く社会・世界観は、自己に対立するものとして社会・世界を捉えるという対立の図式（意識）なのである。（この1つの表現が、現在でも米国などでは銃を所有することが個人・市民の権利として認められていることである。「社会を敵として」という意識があつてのことである。）

不信感を前提にして生成された個々人によって営まれる「生」は、孤立無援の生であり、他者に依存することができない（許されない）（日本人のように他者・周囲に「甘え」ながら生きていくことができない（許されない）生であり、あくまでも「自力」で、自分自身の実力でしか生きられない生なのである。このような厳しい状況の下で自己の生を維持するには自分が「しっかり」するしかない。「しっかりした」自分だけが自己の生を全うさせてくれる。したがって、個々人は自己を構成する全資質から「しっかり」した自分（適者生存の厳しい競争に耐えることができる有能な自分）を再構成するに寄与する資質のみを集めて自己を再構成し、自己の生をこれに委託する。これが「自我」であり、「近代的自我意識」である。

自我の働き（自我機能）のみが、自己に現実適応を達成せしめ、自己の生を可能にする。個々人が抱く自分の「自我」についてのイメージが「自我意識」であり、現実適応との関わりで強調される自我意識が「近代的自我意識」である。西欧人は近代化の時代に「自我」を發明・創造したのである。

② 民主主義

前述のような個人主義の精神をもった個々人で社会が構成されるとき、社会的連帯は不可能である。しかし、人間は類的存在であり、1人では精神的にも、身体的にも生きて行くことができない。したがって、人類の発生以来人類は社会を形成し、その下での相互支援によって生きてきたのである。

社会がそれを構成する個々人の生に寄与するためには、社会が全体として一定の行動方針（政治、経済、外交、福祉などの分野における政策）の下に活動する必要がある。そのためには、さし当っては社会は全体としての行動方針を決定する方法、すなわち、「決議方法」をもつ必要がある。

社会的連帯が十分に存在するなら「全員一致」の決議方法が可能であるし、また、それが望ましい。西欧社会の中世においては、「全体主義」（「村八分」ではなく、「村十分」であったと云う。）の下での「全員一致」の決議方法であったという（例えば、ローマ法王の選出）。しかし、前述したような個人主義の下では社会的連帯は不可能である。ここで採られた方法が「多数決原理」を決議方法とするものである。したがって、民主主義とは「共感なき共存の形成（一体感が失われて断絶感・不信感をもった個々人による集団が共存するための決議方法）」なのである。

多数決原理とは、鯖田が指摘するように、多数意見の尊重と同時に少数の反対者の「生」を可能にする、換言すれば、反対意見の少数者の「生」を保証するものであ

る。全員一致の下では、現実的には反対する少数者の採るべき道は、「自己の意志」を捨てて多数意見に形式的に同調するか、あくまでも自己の意志を貫き通すことによって殺されるかの2つに1つなのである。また、この多数決原理は、現実的運用においては少数意見を尊重することもできる。(例えば、憲法改正には国民の2/3よりも多数の賛成が必要であるとしておけば、1/3の少数の反対者の意見が尊重されることになる。)

西欧社会は階級社会であるから、階級的対立を止揚するために少数(支配者)意見と多数(被支配者)意見とを同時に1つの原理(方法)において尊重できるようにすることが必要である。したがって、民主主義・多数決原理とは極めて政治的(社会的勢力の対立の止揚)(ということは、現実的、实际的)で、かつ、便宜的な政治手段なのである。

これこそ正に西欧近代化の挫折の時代の西欧的産物なのである。したがって、民主主義が「正しい」政治的手段であるという保証はどこにもない。そもそもこの世に「正しさ」などない(「色不異空、空不異色」)。多数決原理によって「正しい」意見は導出されない。「判断能力」が「正規分布」すると仮定すれば、集団の平均的な判断能力をもった人は多数派となる。したがって、彼の意見が集団の意見となる。民主主義のことを「衆愚政治」というのはこの意味においてである。

「日本的民主主義」とは、「多数決原理の絶対視」のことである。多数決原理の絶対視とは「多数意見は「正しい」という思想なのである。これは、日本人の「能力平等観」(したがって、「正規分布」しない。)から由来する。能力平等観の因は「一体感」である。これらのことに、もちろん、日本人は無自覚である。

要は「多勢に無勢」の発想が「多数決原理」の因である。「数」が問題で、「質」は捨象されている。人間不信に基づく形式的な人間把握なのである。歴史的に革命を体験した西欧人は「数」の「重み」を痛感している。(支配階級がjournalismの世界を完璧に掌握しているのはこのせいである。「報道の自由」とは、支配側に有利なように報道する「自由」なのである。)

③ 「人間関係」の様式

人間関係とは、個人と個人との関係のことである。ここでの「個人」とは、あくまでも、前述したような西欧近代化の挫折の時代に生成された「不信感」によって析出された「個人」なのである。したがって、そのような個人と個人との間は「断絶」している。それゆえ、このままでは関係は成立しえない。つまり、人間関係は成立しえないのである。

しかし、人間は類的存在であるから、何等かの手段を施すことによって人間関係を成立させねばならない。西

欧近代化の挫折の時代に西欧人、西欧社会は、この「手段」、すなわち、「共感なき共存の形成」を創造したのである。

個人と社会(個人を構成要素として組織された個人の集合体)との関係は「法」によって成立するのである。欧米社会における市民の日常生活は「法律」、「法観念」によってのみ成立するのである。日本人の「法観念」は「伝家の宝刀」であって、日本の社会における日本人の日常の市民生活に「法」は不要である。あまりに対照的である。

公的次元における個人と個人との関係は「契約」によって成立する。そして、私的次元における関係は「資格」を介在させることによってのみ成立するのである。日本人のように「資格」抜きで人と人とが「直接的」に「接触」する(「直接々触的人間関係」)ことは不可能なのである。資格とは中根³⁾によれば「一定の個人を他から区別しうる質的な基準」とのことである。資格の具体的な例としては、氏、素性、階級、宗教、学歴、職業、経済的地位、社会的地位、性、人種などである。各々の資格に対しては一定の社会的評価が付随する。したがって、個人は、彼の所有する諸々の資格を通して総合的な社会的評価を得る。そして、その結果、社会的地位が決定される。

資格を介在させての人間関係においては、資格の「重要さ」と「同一性・類似性」(例えば、「学歴」という資格の「有意味度」と「学歴」という1つの資格についての同一性・類似性)によってその結合強度が規定されるのである。

④ 近代合理主義

合理主義とは、自己が「支配・操作・管理・制御」しようとする対象をその対象のもつ固有の「理(法則性)」に則って自己の益のために支配、操作、管理、制御しようとする態度(精神)である。対象の理を把握する最も有効な手段が、「近代自然科学」、「科学」なのである。この意味で近代合理主義は近代自然科学の成立の思想的基盤となった。

この合理主義の前提が「対象化」された「対象」の存在なのである。

西欧近代化の挫折の時代に西欧人が自己の置かれた生活環境の中で生の挫折を体験したことが、彼等をして外界に対する「断絶感」を生ぜしめた。この断絶感が、外界を自己を「受容」せず、「拒否」するもの、自己に敵対して自己の生を阻むもの、自己同一視できない自己とは異なるものとして「見る・認識する・理解する」という「対象化」の態度(心理特性)を西欧人の精神構造(心理特性)として形成したのである。したがって、「断絶感」が近代合理主義の生成因なのである。

前述したように、日本人の根源的心理特性は「一体感」であった。当然「対象化」は不可能である。「一体感」から派生する心理特性は「非合理主義」ならぬ「反合理主義」である。「一体感」は、対象の「理」ではなく、自己の側の「情（欲求、感情）」に則って対象を支配、操作、管理、制御しようとする態度（心理特性）を導出する。正に「合理主義」とは正反対である。「念ずれば通じる」、「精神一到」、「成せば成る」の精神である。苦勞（挫折）したことがない過保護人間（民族）の精神構造（心理特性）である。事実、現実の日本人の行動の中に「今」も（「日本国憲法」）、そして、「昔」も（「特攻作戦」）随所に「反合理主義」の精神の存在を認めることができる。

⑤ 近代自然科学

「近代自然科学」の成立因は「断絶感」である。前述したように、断絶感は外界に対する対象化の態度を生成する。外界に対する対象化の態度は自然環境（とその構成要素と）を対象化する。対象化は、「対象に対する観察」→「仮説の導出」→「実験・調査」→「結果」→「法則の定立・発見」という自然科学、実証科学における法則の獲得の一連の過程（手続）を発動させる。よって、断絶感が近代自然科学、実証科学を成立させた因なのである。

3.4 西欧人の根源的心理特性としての「断絶感」の心理

前述したように、西欧近代化の挫折の時代の西欧人の精神的所産は極めて「西欧的」なるものであった。そして、それらを成立させる因となったのが、前述のように「断絶感」であった。したがって、西欧人の根源的心理特性は、「断絶感」の心理であると結論できる。

4 今後の課題

日本人の根源的心理特性が「一体感」の心理であり、西欧人の「それ」が「断絶感」の心理であるならば、これらの心理特性が如何なる原因によって形成されてきたかを明らかにすることである。木村⁹⁾は、西欧近代化の挫折の時代における西欧人の「生（身体的・物理的・生理的）」の挫折が「断絶感」の因であるとしている。とすれば、「生活環境」、そして、それを根源的に規制する「自然環境」がその因であると考えられる。したがって、民族の生活環境となる自然環境が民族の精神構造を形成しうるか否かを論理的に検討することが次の課題となる。

文 献

- [1] 塹江清志：「労務管理－日本的労務管理論」, 日刊工業新聞社（1994）
- [2] 源 了圓：「義理と人情」, 中央公論社（1969）
- [3] 中根千枝：「タテ社会の人間関係」, 講談社（1967）
- [4] 小比木啓吾：「日本人の阿閩世コンプレックス」, （1982）
- [5] 木村 敏：「人と人との間」, 弘文堂（1972）
- [6] 土居健郎：「甘えの構造」, 弘文堂（1971）
- [7] 小島瓔禮：「日本の神話」, 筑摩書房（1983）
- [8] 木村尚三郎：「近代の神話」, 中央公論社（1975）
- [9] 鯖田豊之：「肉食の思想」, 中央公論社（1966）